

# さくらん

2007(平成19)年11月25日鑑賞(国際シネマ)

★★★



監督＝蜷川実花／原作＝安野モヨコ『さくらん』（講談社刊）／脚本＝タナダユキ／音楽＝椎名林檎／出演＝土屋アンナ／椎名桔平／成宮寛貴／木村佳乃／菅野美穂／石橋蓮司／夏木マリ／安藤政信／特別出演＝市川左團次（アスミック・エース配給／2007年日本映画／111分）

……公開から8カ月遅れて観た『さくらん』は評判どおりの色彩美と艶やかさだったが、ストーリー的にはイマイチ……？ とりわけ不満なのは、セックスシーンのソフトさ……？ また、3人の美女たちのバトルの激しさと対比される、4人の男たち（？）の善良さと心やさしさには、少しイライラ……？ 「女性上位」も悪くはないが、やはり男の視点も必要なのでは……？

## 見逃していた話題作を今

2007年3月3日より全国公開された『さくらん』は、蜷川実花監督、安野モヨコ原作、タナダユキ脚本、椎名林檎音楽、土屋アンナ主演の話題作だったが、残念ながら私は見逃していたもの。それが今国際シネマで上映中と知り、映画館へ。既に多くの人が観ていると思うし、『キネマ旬報』3月上旬号には巻頭特集として『さくらん』が取りあげられているので、ストーリー絡みの評論は一切せず、いくつかの坂和流ポイントだけ紹介したい。

## ポイント その1——3人の美女比較

この映画最大のポイントはきよ葉と日暮を演ずる土屋アンナの強烈な個性。そして、この映画ではそれをより強く浮かびあがらせるため、①幼いきよ葉の面倒をみる完璧な高級花魁、粧ひ（菅野美穂）と、②何かと目の上のタンコブ的存在となる玉屋敷の看板花魁、高尾（木村佳乃）を登場させている。

3人ともいずれ劣らぬ美女ぞろいだが、その美貌ぶりの対比以上に、この映画では

その性格の対比が大切。とりわけ間夫（まぶ）（遊女がもつことを公認されていた恋人のこと）をめぐるきよ葉の価値観と高尾の価値観の衝突は、同じ女、同じ女郎であるため厳しいものに。

さて、そんな3人の美女の確執を、蜷川実花監督と脚本を書いたタナダユキは女の視点からどのように表現を……？

## ポイント その2——映像美は？ 色彩美は？

この映画は、写真家である蜷川実花の初監督作品。しかも、吉原の遊廓に住む花魁を中心に据えた映画だから、その注目点は映像美、とりわけ色彩美。その特徴は映画の冒頭、大きくクローズアップされて映される金魚の姿に表現されている。

この「ビードロの中の金魚」は色彩美の点で際立っているが、ストーリー構成上は「ビードロ（遊廓）の中でしか生きていけない金魚（遊女）」という意味で再三登場するからじっくり味わいたい。また、満開の桜の美しさの他、花魁道中の様式美、花魁ならではの華麗な衣装など赤を基調とした色彩の美しさは、さすが写真家蜷川実花と私も大いに感心！

## ポイント その3——セックスシーンの満足度は……？

遊廓は女郎の世界だから、男がそこに行くのはセックスを中心とした快楽を求めるため。しかし、江戸時代の遊廓はセックス目的だけの売春宿ではなく、踊りと飲食がセットにされたお楽しみも兼ねていたから、いわば銀座の高級クラブと高級売春クラブがセットになったようなもの……？ そして、吉原遊廓の中でも数少ない花魁は、美貌はもちろん飲食でのサービス術とセックスのテクニックにおいて最高峰を極めた女。

そこで私は、花魁やその前身である禿（かむろ）や新造（しんぞう）の遊女たちがどんなセックスサービスを提供しているのかという点に注目したのだが、きよ葉が子どもの時に粧ひが見せたセックスシーンも、花魁となった日暮がみせるセックスシーンもいわゆる女上位の全く同じ体位だし、上玉客に対してみせるセックステクニックもそれほど大したものではなさそう……？ 女性監督が女の目で描いたセックスシーンだからソフトさを大切にしたのかもしれないが、この程度のテクニックである時代の客はホントに満足していたの……？

## ポイント その4——咲く桜と咲かない桜

この映画は写真家蜷川実花の監督作品らしく、「桜に始まり桜に終わる」が、面白いのは「咲く桜」と「咲かない桜」を対照的に示していること。「咲かない桜」とは遊廓の中にある1本の桜の木だが、なぜか春になっても全然花が咲かないらしい。

この「咲かない桜」がこの映画のストーリー構成上の象徴的な存在。身売りされてきた少女時代のきよ葉は、この桜の花を咲かせるように、きっと自力で吉原から出て行ってやると決意したのだが……。

## ポイント その5——きよ葉、日暮をめぐる4人の男たちのやさしいこと

この映画に登場する2人の主要な男は、第1に少女時代からずっときよ葉を見守ってきた玉菊屋の店番の清次（安藤政信）。彼は女郎が生んだ父なし子だが、玉菊屋の楼主（石橋蓮司）とその妻である女将（夏木マリ）が大事に育ててきたため、楼主の姪っ子と結婚して玉菊屋の後継者に、とまで指名されるのだが、さて清次の選択は……？

第2は後半になって登場する何とも人のいい大名の倉之助（椎名桔平）。花魁を武家の正妻にというのもヘンな話だが、妊娠と流産がわかってもなおかつ「結婚してくれ」とは、いくら何でもあり得ない……？ いくら魅力的な花魁でも、結婚となれば話は別だと私は思うのだが……。

第3は当初きよ葉の間夫（まぶ）として登場するものの、きよ葉をめぐる武家と鉢合わせすると敵前逃亡してしまう色男の惣次郎（成宮寛貴）。いくら手練手管に長けた吉原の女郎でも、男との恋愛についてはやはり身をもって学習することが大切ということかも……？

そして第4に私が面白いと思った男はいかにもスケベ親父風の高野屋のご隠居、文左衛門（市川左團次）。きよ葉の「突き出し」（17～18歳になった新造がはじめて客を取り一本立ちするお披露目のこと）のお相手として、この文左衛門が登場したのはわかるが、結婚のため吉原を出ていく日暮の最後の客としてまた登場するとは、何とも義理堅くかつお元気なこと。といっても、今ドキのバイアグラのような良薬（？）がない時代、もはやその方面はお役に立たないように私には思えたが……？

以上、すさまじい権力闘争をくり広げる3人の女たちと比べ、4人の男たちの何と

も善良で、心やさしいこと……。そんな視点もしっかりと。

### 『赤い文化住宅の初子』は面白かったが……

『さくらん』の脚本を書いたタナダユキは、『さくらん』の後2007年5月公開の『赤い文化住宅の初子』（07年）を初監督した。「カネ、カネ、カネ……」とつぶやきながら1人トボトボと家に向かうシーンが印象的なこの映画は、すごく刺激的で面白かった（『シネマルーム13』214頁参照）。

しかし、『さくらん』のストーリーはわりと平板で、土屋アンナの個性と写真家蜷川実花の色彩感だけがこの映画の売りとなっていたのは少し残念。また、冒頭に登場する、豪華な衣装を身にまとったきよ葉が、「なめんじゃねーよ」と叫びながら豪快な飛び蹴りをくわすシーンは、土屋アンナの個性をイメージしたためだろうが、私の目には明らかに余分で、そんなシーンによってこの映画がマンガ的になってしまう弊害も……。 もっともこれは、この映画に何を求めるかによって人それぞれだろうが……。

2007(平成19)年11月26日記